

抜粋

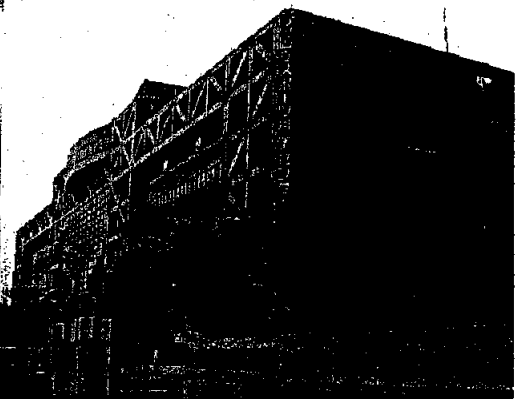
平成16年度

文部科学白書

「生きる力」を支える心と体



文部科学省 編



第1節 「生きる力」と心と体の関係

今日の変化の激しい社会においては、他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる、人間としての実践的な力、すなわち「生きる力」を子どものころからバランスよくはぐくんでいくことが求められています。

「生きる力」は大きく分けると「健やかな体」「豊かな人間性」「確かな学力」などから構成されています。これらは独立して機能するものではなく、例えば、運動能力、正義感、思考力など様々な要素に分かれて、日々子どもの内面で複雑に作用し合って機能するものです。このように「生きる力」は、心と体の双方と深くかかわっています。

例えば、「人のために働きたい」という心の働きが、実際の勤労・奉仕活動という具体的な行動の前提となるように、心の働きが「生きる力」の資質・能力を支える基盤となっています。このほかにも「何だろう、なぜだろう」といった好奇心、「知りたい、できるようになりたい」といった意志などは知的活動も含めたあらゆる活動を支える要素です。一方、有意義な活動を適切に継続して行うためには健康であることが必要であり、調和のとれた食事や十分な休養・睡眠とともに、適切な運動によって体力を向上させることが不可欠です。このように体力は、人間の発達・成長を支え、創造的な活動をするために不可欠なものであり、「生きる力」を支える原動力であるといえます。

また、体力にかかわる活動は、心の発達にも深くかかわっています。例えば、子どもは、仲間との遊びなどを通じて、身体能力を向上させるだけでなく、他者とのかかわり方を自然に身に付けるなど、知力や人間性の向上を支える基礎をはぐくんでいます。さらに、子どもたちがスポーツなどを通じて体験する、自然や仲間との交流、スポーツマンシップにのっとりた行動、目標に向けての練習とその達成のための取組などは、共生感や協調性、ルールを守り公正さを重んじる精神、思いやりの心、克己心などを培う上でも大きな役割を果たしています。その一方で、体を動かすことによって得られる楽しさ、爽快感、達成感といった心の働きは、体力づくりの動機付けとなるなど、心と体は相互に作用し合っています。

また、心と体をはぐくむ上で、自然体験や社会体験は極めて重要です。子どもは自然や社会とのかかわりの中で感動、驚き、あるいは挫折や克服といった様々な体験を積み重ねながら、たくましく「生きる力」を支える心と体をはぐくんでいきます。

このように、心と体は「生きる力」を支える役割を果たしています。そのため、心と体の健やかな発達に資する環境づくりを推進することは、地域・学校・家庭に課せられた重大な使命であると言えます。

第2節 子どもの心と体の現状

近年、社会の様々な分野で見られる急速な発展は、国民に恩恵をもたらす一方、人間関係の希薄化、精神的なストレスの増大や運動不足など、様々な問題を生み出してきています。こうした状況は、大人はもとより子どもの生活に様々な影響を与えています。

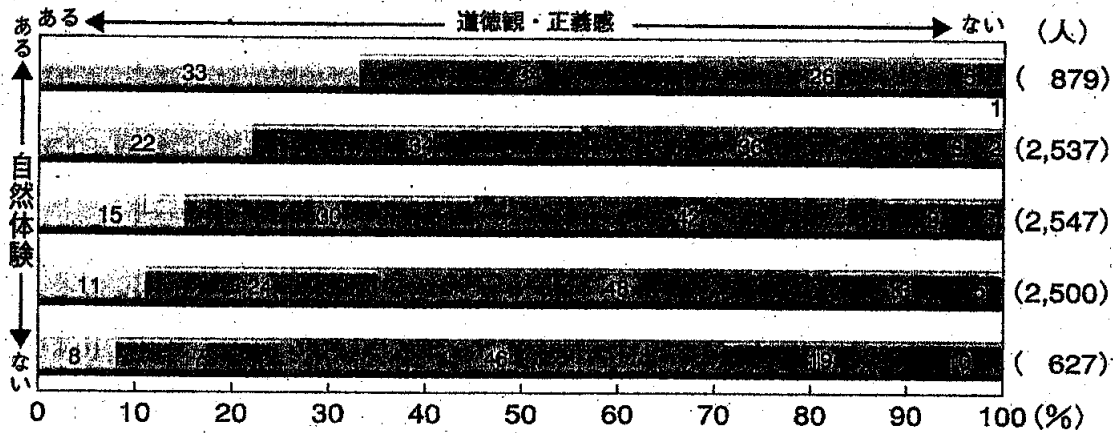
地域においては、都市化の進行などによる連帯感の希薄化や地域の教育力の低下が指摘されています。また、これに伴って子どもたちの遊びの形態が変化し日常生活の中で体を動かす機会が減少するとともに、豊かな人間性の形成に欠かせない自然や社会とかかわる機会が減少す

るなど、子どもの心と体に及ぼす影響が指摘されています（図表1）。

図表 ◆ 1 体験活動と道徳性の発達の間関

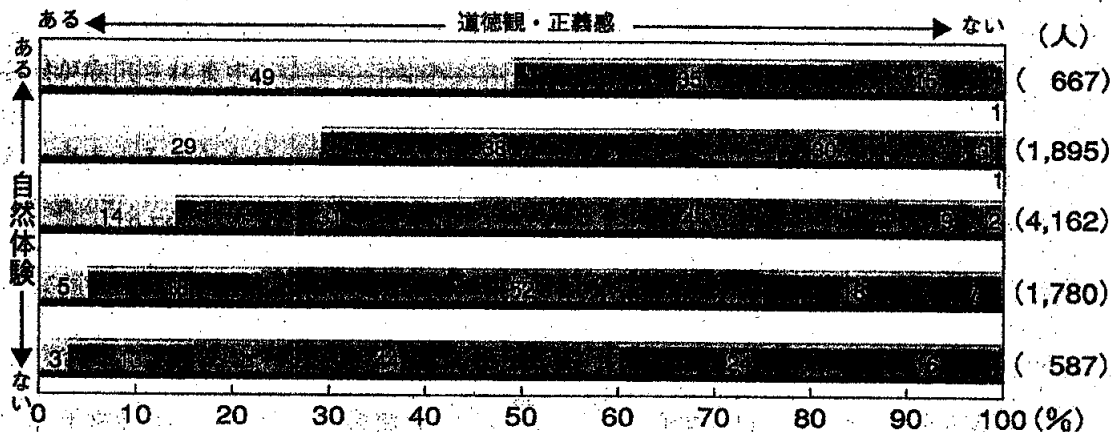
○自然体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が身に付いている

「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」等の自然体験の度合いと「友達が悪いことをしていたら、やめさせる」等の道徳観・正義感の度合いを、それぞれ点数化してクロス集計したところ、「自然体験」が豊富な子どもほど、「道徳観・正義感」が身に付いている傾向が見受けられた。



○生活体験が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が身に付いている

「小さい子どもを背負ったり、遊んであげたりしたこと」等の生活体験の度合いと「友達が悪いことをしていたら、やめさせる」等の道徳観・正義感の度合いを、それぞれ点数化してクロス集計したところ、「生活体験」が豊富な子どもほど、「道徳観・正義感」が身に付いている傾向が見受けられた。



(資料)「子どもの体験活動等に関するアンケート調査(抜粋)」(平成11年3月文部省(当時)委嘱調査)